

聖書 詩編121篇1節-8。 コリントⅡ 1章3節-7節。

〈あなたが出でたつのも帰るのも主が見守ってくださるように〉(Ps121:8)。

〈私たちが神からいただくこの慰めによって、あらゆる苦難の中にある人々を慰めることができます。〉(CorⅡ1:4)

1、「目を上げて、私は山々を仰ぐ」。詩編121編は、「山辺に向いて、われ目をあぐ」(54版301)の別所梅之助作詞の讚美歌とともに日本人の信仰に深く根付いている。私もこの詩と共に、若き日、教会のキャンプでの夕陽会(夕べの礼拝)で、家族から離れ、「私はここにいる」という単独者の自覚を深されたことを思い起こす。この詩は一人称の「私」を自覚させる。人生の旅路は基本的に「独り」であり、その自覚が初めて、家族への、友人への、同志への、社会への、直接性でない関わりを新たに生み出す。「独り」になれない者は、ほんとうに二人にはなれない。まして、交わり、連帯、共同といった社会への関わりが上っ面になって、深まらない。この詩は人生の旅路が基本的に「独り」であることを、そして「独り」であるとは恵みであり、人間を超えた「神」の業であること悟らせる。そこは「慰め」の働く場である。

2、この詩の生活の座は明確ではないが、ほぼエルサレムへの巡礼者が「旅の歌」として用いたとされている。対話のある交唱の形式がとられている。一般に旅に出る子供に父が祝福と激励を与えたのか、エルサレムの礼拝(祭り)を終わって帰途につ民に祭司が激励の声を掛けた礼拝文なのか。いずれにせよ「旅の備え」の詩である。

「神ともにいましてゆく道をまもり」の讚美歌(54版405)を連想させる。

3、「山々」。二つの説がある。神殿のあるエルサレムの山々。「山」は天に近く、神を想像させる。日本人の自然観からもなじまれている。映画「サウンド・オブ・ミュージック」の主人公マリアは一家が独軍に追われ修道院裏口から逃げ出す危機の時、「われ山にむかいて目をあげる」と叫ぶ。そしてスイス・アルプスへの国境を超える。山々は神がいます所を暗示している。第二の考え方。山は危険な場所である。強盗が襲う(ルカ10:30)。人生の危険を予想している。この詩の時代を、捕囚期の終わり帰還の前と考えれば、超えねばならない国境の山々の険しさ困難を暗示する。「山々を仰ぐ」とは、行く手の「旅」の危険を想像させる。

4、「天地をつくられた主のもとから」は、山の高みに聖所を持つ異教のカナン宗教の否定である。被造物(自然、人間の文化、経済の力)を絶対化してはならない。安倍の「経済の発展が人間の幸福」「抑止力が平和」という神話とは闘う以外にない。

5、「まどろむことなく」。カナンの植物神は冬眠をする(列王上18:27fエリヤの物語)。「主はあなたを見守る方」(5)の「見守る方」はこの詩編に6回出てくる。見守る方に覚えられていることはどんなに慰めか。新約聖書コリントⅡでは、は「イエス・キリストの父なる神」を「苦難に際して私たちが慰めてくださる神」と表現している。それゆえに私たちが苦難にあるものを慰めることが許されている、と励ます。

「慰める力」が「慰める方」を悟らせる。「出で立つのも帰るのも」(8)。旅の終わりはこの世を出て立ち、神の御許に帰る時ではないか。葬儀の出棺式でいく度読んだことであろうか。それぞれに与えられている「慰める力」に気付き大切にしたい。